

意見集約して実現目指す



埼玉県議会議員
藤本 正人氏

ふじもと・まさひと 昭和36
年生まれ。元中学教諭。所沢
市職2期。埼玉県職3期目。

藤本 正人氏

埼玉県内外の学校を何校も視察した。ある中学校では、2時間ほど自由に校内を見せられても良かった。授業に関心を示さず、たむろする生徒たちを前に、私たちがはびこっていたこの現実を改めることができないだろうか考えた。ある高校では、そもそも生徒があまり学校に来ていなかった。義務教育段階の学習内容を身に付けられないまま、高校に進学したものの、学習への動機付けを見いだすことがなく、日々を送っているようだった。

移動中のバス内では、職員たちが興奮して、感想などを語り合っていた。現実を見ることの力は強い。誰もが何とかしなければならぬという思いを持った。私たちは、見えてきた現実を踏まえて決議をまとめることにした。車中で聞かせてきた声を思い出し、

つ文案をまとめた。各会派にお示しすると、幾分の修正は経たももの決議文はまとまり、本会議でも田沼に可決された。

教育分野で新たな視察、具体的な提案をするためには、学校現場の動向や、教育長の発想などが紹介された教育専門紙・誌から得られる情報は有用だ。参考になっている。

さて、先月中旬、津波の被害を受けた宮城県石巻市を訪問、家屋から泥を出すなどの作業に参加した。そして、ぜひとも学校の先生方に被災地ボランティアを経験してほしいと思つた。そこで、埼玉県教委にも選挙区の所沢市教委にも、教員対象のボランティア部隊を編成してはどうかと、持ち掛け、自分でも企画した。教員を長く続けていると、子どもたちに断えず掛けるための何かがある。何かを感得して、考え、そこから子どもたちに贈ることが生まれるはずだと信じてやまない。手を返す手なしで、実現させたい。

誰もが生徒だった。そして誰もが親だった。だから、教育に対しては誰もが一家言持つ。結局、百家争鳴、意見はまとまらず、議会が機軸意思を示すことはできない。また、多対一の場で教育が行われるのが学校教育の現実である。が、その認識が往々にして抜け落ちる。これが教育に対する議会の決定的弱点である。

昨年度は、県議会で文教委員会委員長を務めた。委員会なら議決できようだった。幸い、議会として委員会を、委員会として委員長を、尊重してくれる風土が埼玉県議会にはあった。そこで、同じ現実を一緒に見て行きたいだった。同じものを見れば思いも同じになると思つたからである。昨年の秋ごろには困難を抱えた学校を多く訪ねようとして

埼玉県議の働き掛けで 有志教員が被災地支援活動



車座になって震災後の生活について耳を傾ける＝石巻市内で

埼玉県内の公立学校に勤める教員らが先月下旬、バスを借り切って宮城県石巻市などを訪問、津波の被害を受けた民家の復旧作業に参加したり、津波で自宅を失った教員から話を聞いたりする「ボランティアツアー」を行った。

深刻な被災地を支援すると同時に、現地で経験を自分の教育活動に生かすことが目的。参加した教員は、自分がくみ出し、異臭のひどかった泥を空きボトルに詰めて持

ち帰るなどしていた。

藤本正人・埼玉県議会議員が中心となって企画した催し。所沢市、狭山市などから、校長、教頭、教諭、指導主事、臨時採用教員、教員を目指す学生らが参加した。

金曜日の夜10時に所沢市内に集まった39人は、車中泊の後、現地に常駐するボランティアグループの一人に案内してもらって、活動場所に向かった。

製紙工場から流れ出たパルプが混ざった泥は異

臭を放つ。校長も学生も職員も汗を流したらせて運んだ。昼休みには、住民から津波が来た時の様子を教えてもらうなどした。避難所となっている公民館、自宅を津波で失った教員が勤めている小学校も訪ねた。

年次研修に位置付けようと、現地のボランティアセンターが発行する参加証明書の特典を求める教員もいた。同議員は行政によるボランティアツアーの実現に向けて働き掛けていく考えだ。